断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑤

高橋 基

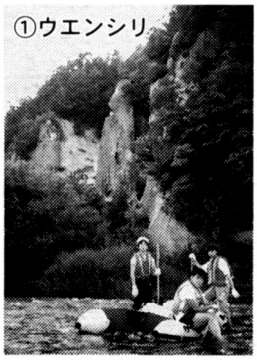
―美瑛川の地名解と景観―

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、美瑛川は、「ピイェ(piye 油―水源ニ硫黄山アリテ**水濁リ脂ノ如シ**、故ニ名ヅク。古ヘハ単流シテ石狩川ニ注グ。今、東川(註・チュプペッ=忠別川)ニ合流ス」と地名解し、往古、美瑛川は忠別川と合流しないで、直接、石狩川へ流入していたという貴重な伝承を附記した。

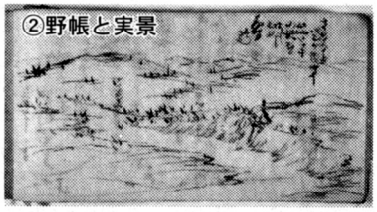
松浦武四郎が安政四年(一八五七年)と五年に旭川調査の基地にした忠別太の大番屋は、美瑛川の古川の側に建っていたと永田方正は書き、その古川を、「フシュコピイェメム(古い・美瑛川の・池)」と記録した。

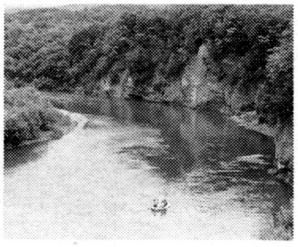
しかし、松浦武四郎は、忠別川のマクンベツ(川が左右に分かれている流れ)の右の流れに入り、大番屋に到着している。明治六年のワッソン、同七年のライマン、同九年の松本十郎たちは、いずれも、忠別川の古川を溯ってこの大番屋の最後の姿を目撃している。この大番屋は、旭川大橋の下流左岸、現在の忠和三ノ七付近にあったと推定される。

永田と同じ明治二十三年の「上川離宮建設地調査復命書」では、「魚類ハチユプペツ川ニ最モ多ク、ピイエ川ニ稍々少シ、**鮭魚ノ如キハ絶ヘテ栖息セズ**」と報告。他方、明治二十年、殖民地撰定に当たった福原鉄之輔は、その調査復命書に、「(美瑛川ハ)其深平均四尺許、水質汚濁**其色淡乳白**、而シテ水中ノ石礫皆帯青褐色ノ沈澱ヲ着ス。(中略)現ニ盛夏涸水ノ候ニ当リ魚族往々硫毒ノ脳ス所トナリ為メニ死スル者夥シト云フ」と当時の状況を書いた。福原の復命書では、西ヲプタテシケの噴火山は黒煙を吐いていると明記している。史資料や聞き取り調査から、美瑛川は、鮭は全く遡上しないのではなく、水源の山々の噴火に左右されたようである。


①ウエンシリ

さて、安政四年に松浦武四郎は、美瑛川を遡り、辺別川との合流点で一泊して、帰途についたと報告書に書いた。しかし、彼の野帳からも美瑛川は踏査せず、聞き書きであったことが判明する。**写真①**のウエンシリは、「ウエンシリ(wen-sir険しい・崖)―川岸の断崖」を意味する。西神楽の新開橋下流、競馬場の裏手にある約一キロにわたる川岸の断崖絶壁である。この景観を松浦は全く記述していない。


②野帳と実景



写真②は、深川市との境界の内大部川口の石狩川下流の断崖である。この絶壁の所でチョウザメを捕って、内大部川に運んだと、永田方正が書いた絶壁の景観である。松浦武四郎は、この鳥瞰図を野帳と稿本にも描いている。その松浦武四郎が約一キロに及ぶ美瑛川のウエンシリの絶景を描かなかったのは、実際に踏査していない証左でもある。

いずれも、ゴムボートで川を下り、松浦武四郎の踏査の追跡調査をして発見した真実の姿である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します